Q.インターフェロンには副作用がありますね。
菅内部長／インフルエンザにかかったときのような発熱、倦怠感、頭痛、悪寒などがあります。そのほか重篤な合併症もあるので、投与を受ける前は主治医とよく相談することが必要です。

Q.インターフェロンの適応範囲はありますか。
菅内部長／だいたい65歳から70歳位までです。

Q.つまり、70歳未満で、肝機能が異常値であることが分かればインターフェロンの治療は行われる可能性があるということですね。
菅内部長／定期的に血液検査を行い、肝機能と血小板の数値が正常値を超えたと判明した時は、即座にインターフェロンの治療を行います。

Q.男性と女性とでは治療効果に差はありますか。
菅内部長／女性の高齢者では治療効果は下がります。

Q.B型肝炎の治療効果はどうですか。
菅内部長／20歳代はインターフェロンの効果が期待できますが、30歳代を超えると効果は徐々に落ちてきます。つまり、若い人ほど効果は大きく、35歳を超えると、インターフェロンではなく、単独で核酸アナログ製剤を投与します。

Q.C型肝炎と、B型肝炎とでは治療法が違うということですね。
菅内部長／違います。

Q.予防法は。
菅内部長／自己防衛法としては、ピアス、刺青などはしない、性行為感染もあるので、注意が必要です。また、医療従事者らハイリスクの仕事に携わっている方は、定期的に血液検査を受けて感染していないかどうかを確かめることが大事です。

Q.ウイルス性肝炎の動向に変化はありますか。
菅内部長／これまでわが国にはなく、欧米にしかないタイプのB型肝炎が見つかっています。この原因は社会の国際化、及び海外に簡単に旅行できるようになり、そこで、何らかの形で感染するためだと思います。このタイプに対しては、国でも研究班を作って対策に取り組んでいます。

Q.肝臓がんのことについてお尋ねします。肝臓がんの患者数は。
菅内部長／肝臓がんは、全てのがんの中で男性は第3位、女性は第4位となっており、年間約3万5千人が亡くなっています。ただ、治療薬の開発や母子感染の予防に取り組んでいることなどの効果もあって肝臓がんになる人は減っているか、横ばい状態になっています。

Q.肝臓がんの原因は。
菅内部長／8割前後が、C型肝炎です。

Q.肝臓がんとC型肝炎との関係は。
菅内部長／この二つには深い関係があります。肝臓がんは、C型肝炎にかかると時間的経過とともに慢性肝炎になります。それが、さらに進行すると、肝硬変に移行します。そして最後に肝臓がんになります。従って、肝臓がんのもともとの病気はC型肝炎です。

Q.早期の症状はありますか。
菅内部長／肝臓は沈黙の臓器と言われており、我慢強く、早期の症状は出にくく、症状が出てきたときは、進行した状態が多いです。早期の症状ではありませんが、黄だんやお腹に水がたまるといった症状などがあります。

Q.診断法は。
菅内部長／MRIとCTの組み合わせの検査や超音波検査、それに定期的な血液検査で肝臓がんに反応する腫瘍マーカー検査を受けることによって6割から7割見つけることができます。

Q.C型肝炎から肝臓がんになるまでの時間的経過は。
菅内部長／C型肝炎から慢性肝炎まで約10年、慢性肝炎から肝硬変まで約10年、肝硬変から肝臓がんまで約10年かかります。

Q.C型肝炎になってから肝臓がんになるまでに約30年前後の時間がかかるということですね。治療法は。
菅内部長／手術でがんを切除するのが第一の選択治療になります。しかし、手術ができない場合は、薬などの内科的治療になります。ここ数年、大きな成果をあげているのが体外からがんに直接針を刺してラジオ波で治療する方法です。適応範囲は大きさが3センチ前後で、がんは3個までです。

Q.効果はどうですか。
菅内部長／適応範囲のがんであれば、ほぼがんは消滅します。

Q.そのほかの治療法は。
菅内部長／動脈塞栓術があります。この治療法は、がんの栄養補給になっている血管に抗がん剤を投与する治療法です。

Q.最近の治療法はありますか。
菅内部長／がんを標的にした薬剤を使って治療する分子標的療法があります。この治療法は肝臓がんでは延命効果はありますが、治癒は期待できません。

とにかく、身内にC型肝炎やB型肝炎になった人がいたり、検査でC型肝炎、B型肝炎と分かれば定期的な検査を受けることです。治療を受けている患者さんは状態が良いからといって自己診断して止めたりしないで医師の指示に従ってほしいと思います。